

# 見果てぬ夢としてのアソシエーション 協同性、労指関係、瞬時の意思疎通

専修大学社会科学研究所シンポジウム

「アソシエーションの将来：絶望と希望の狭間で」

2023年1月22日(日)14:00-17:00

小野塚 知二

東京大学特命教授／名誉教授、放送大学客員教授

# はじめに

## 1. 人の本質としての共同作業と支配

ヒト：ひ弱な存在。一匹では到底生きられない。

⇒共同作業

人間にとって運命的な不可避なこと。ヒトは共同作業を通じて、自らを最初の家畜=人間にした。

しかし、共同作業には指揮命令=服従実行の相補的関係がつきまとう。

近現代になって、個人の自由が尊重されるようになって、共同作業における支配=被支配は強まりこそすれ、なくなったことはない。

では、それは本当に不可避なのか？

# はじめに

## 2.「アソシエーション：永遠の希望と永遠の絶望」

アソシエーション(協同性)は、近現代社会の共同作業における支配=被支配関係から解放されるための夢の言葉であった。他にも「連帯」、「友愛」、「協働」、等々。

アソシエーションはなぜ希望の言葉であったのか？  
それはなぜ失敗し続け、絶望の種でもあったのか？

この二つの問いに現時点での暫定的な答を与え、今後の思考の可能性を探ること

# I 協同性の位相

## (1) 人間=社会観の三類型

有機体モデル：個人は細胞。器官も個体も選べないが発言権

原子論モデル：個人の自立。市場／国家に参入／退出の自由

協同性モデル：発言権と出入り自由の良いとこ取り

## (2) 協同性モデルの近代的性格

## (3) 社会主義的性格 Cf. 共産主義、市場原理主義、組織されない複雑系

⇒ 組織された複雑系(socius(仲間、会社、社稷))であるということの重大な意味：

⇒ 誰・何が、いかなる力で組織するのか？

## Ⅱ 分業－効率性－労指関係－支配

分業は効率性を求める。

皆がてんでんばらばらに働くことは分業ではない

労指関係=人間の共同作業の本質としての労指関係

「労使関係」は近代産業社会における労指関係の現象形態であり、雇用が指揮命令権をただちに担保するわけではない(森建資[1988])。

「労資関係(資本賃労働関係)」は資本主義社会における労指関係の疎外態である。所有が支配を生み出すのではない。所有と支配は対応しない。

指揮命令=服従実行関係がすべての上下関係(階級、身分、支配、権力)の本質であり源泉である。

有田光雄[2000]による「批判」⇒小野塚[1989][1998]

# Ⅲ 労指関係を廃棄しようとする試み

(1)市民革命(ブルジョワ的変革)=自由平等な諸個人  
アソシエーション(生産協同組合、株式会社、労働者自主管理企業、自主管理社会主義)はすべて労指関係の廃棄か存続のいずれかで失敗している。

社会主義革命(階級支配の廃絶)⇒しかし、むきだしの労指関係、しかも効率性競争では資本主義に敗北。

共産主義の「夢」(文化大革命、ポルポト独裁)無惨な失敗。

⇒支配と退出を残した株式会社以外はみな失敗

生産協同組合と株式会社は同一の原理だが、支配をなくそうとした生産協同組合は失敗。



# Ⅲ 労指関係を廃棄しようとする試み

## (2)分散型自立組織(DAO)

①現実にDAOで組織設計が完結している事例は、まだない。したがって、それは現状では、語られている夢の一つにすぎない。

②現在、語られているDAOの夢は、基本的に、出資者の間の意思決定に関する「新しい民主主義」の可能性ではあるが、それは、指揮命令と服従実行の関係のうち、指揮命令する者たちとの間の民主的意思決定メカニズムにすぎない。実際に現場で手足を使って物事を動かしている人々まで含めた意思決定の方法としては提案されていないように思われる。というよりも、DAOを提案し、また、それに夢を感じている方々は、現場で汗水流して働く人が意思決定に参加するなどということをもっとも夢想すらしていない(あるいは現場にはそういう人びとがいて社会は物的に成り立っているということをもっともわかっていない)のではないだろうか。

③また、出資者の間の水平的で、自律的な意思決定としてはすでに生産協同組合や労働者協同組合などが2世紀前から連綿と試みられてきたが、一度として安定的に機能したことはない。わたしが理解する限りではDAOもその轍を踏むことになるだろう。

④しかも、ガバナンスストウクンで、貢献度の高い人の提案に投票して、物事と報酬を決めるという意思決定方法は、容易に(というか、ほぼ必然的に)隠れファシスト的な報酬=懲罰メカニズムを生み出すだろう。あるいは文化大革命における紅衛兵の暴力と同じような仕組みになってしまう危険性もある。

# IV 労指関係という問題の本質

自由平等な諸個人の間での労指関係の本質

(1)事前の相談・練習(随時協議と納得形成による各自の役割と関係の自覚)と作業進捗との遅速関係。

作業進捗の方が明らかに速いなら、効率性を重視する場合は労指関係が必要となる。

(2)作業中の意思疎通の可能性(あるいは、作業を一端中断して協議・納得のうえ問題を解決できる可能性=トヨタ・システムの到達点)

榎・小野塚[2014]序章



# V アソシエーションの可能性

(1)「釈迦入滅」的な可能性⇨上座部仏教的な解法：

全員にすべてが明晰に見え、それを全員が共有でき、瞬時に意思決定し、調整し、実行する。

少人数のバンドやアンサンブル。経験的に30人以内

集団競技(サッカー、バスケットボール、バレーボール)

条件：達人たちの、かなり固定的な関係(「ゾーン」)。

凡人向きではない。出家の調和(『ハーモニー』)

長期間、安定的には成立しない(←おそらくは人間の情報感知・処理能力の限界)。社会を担えない。

しかし、不可能ではないことはわかる。

# V アソシエーションの可能性

(2) 大乘仏教的かつ持続可能な解法は？

「勤労の義務」からの人類の解放=ロボット・AI・ITの全面的な活用

際限のない欲望が求める際限のない効率化は、より効率的な自動生産システムを設計することで擬似的には達成できるかもしれない。

Cf. 古代アテネの市民的公共性(H.アーレント)

しかし、そこでもソクラテースに死刑判決を下す(変人を排除する「社会の専制」(J.S.ミル)の)危険性は残る。

# V アソシエーションの可能性

(3)「職業の世界」：ただし、非普遍的・身分制的解法

同じ業種ないし職種の人たち(労働者だけでなく経営者、技師、職長など下級監督者も含む)で構成され、彼らは共通の技と物(道具・機械・労働対象)を用いており、その職業・営業について独自の価値観・判断基準・行動様式を共有する社会。おもに中世から近代(≒19世紀)にかけての熟練職工の職業別・地域別な文化共有集団(榎・小野塚[2014]序章)。

誰もが入ることができるわけではない。正規の入職過程(徒弟修行)を経た者のみ。女性、年少者、高齢者、外国人、他職種の成人はもとより参入できない。つまり、ある種の(早期に決まる)身分制社会。

# V アソシエーションの可能性

## (4) J.C.スコット：絶望の回避

スコットのモラルエコノミーやアナキズムよりも前向きの可能性を、破綻や反理想の危険性を冒してでも追求するのか、それとも、反理想や絶対的悪をまずは回避すべきであり、それゆえ、既存秩序の中でのささやかな抵抗(による漸次的改良(Popper1957))を試みるのみに留めるのか。

悩ましい判断。20世紀にいやというほど理想を試みて、破綻し、しなかった方がましという経験をしている。

# むすびにかえて

人数(共同事業の規模)、効率性、中断討議・合意形成の三つの変数の折り合い、適切な組み合わせは追求する余地がある。

市場を外部資源として、部分的には活用する。

「小国寡民」・自給自足圏への縮小←物財の大量生産ではなく対人サービスの適切な規模。

労指関係に対する、美的価値に基づく拒否・抵抗。

# 参考文献

有田光雄[2000]『非営利組織と民主経営論』かもがわ出版.

井上雅雄[1991]『日本の労働者自主管理』東京大学出版会.

榎一江・小野塚知二編著[2014]『労務管理の生成と終焉』日本経済評論社.

大塚久雄著/小野塚知二編[2021]『共同体の基礎理論 他六篇』岩波文庫.

小野塚知二[1989]「労使関係におけるルールー19世紀後半イギリス機械産業労使関係の集団化と制度化ー」  
(上) 東京大学『社会科学研究』第41巻第3号、1989年11月、pp.1-102.

小野塚知二[1998]「[生協における管理と民主主義](#)」協同組合総合研究所研究報告書第21集『労働運動をめぐる  
論点の現代的総括』、1998年8月、pp.1-29.

小野塚知二[2018a]「近代資本主義とアソシエーション：永遠の希望と永遠の絶望」(梅津順一・小野塚知二編著  
『大塚久雄から資本主義と共同体を考える：コモンウィール・結社・ネーション』日本経済評論社).

小野塚知二[2018b]『経済史：いまを知り、未来を生きるために』有斐閣.

森建資[1988]『雇用関係の生成：イギリス労働政策史序説』木鐸社

Albert O.Hirschman[1970], *Exit, voice, and loyalty : responses to decline in firms, organizations, and states*, Harvard University Press(矢野修一訳『離脱・発言・忠誠：企業・組織・国家における衰退への反応』ミネルヴァ書房、2005年).

Karl Raimund Popper[1957], *The poverty of historicism*, Routledge(『歴史主義の貧困』中央公論社、1961年).

James C. Scott[1976], *The moral economy of the peasant : rebellion and subsistence in Southeast Asia*, Yale University Press(高橋彰訳『モラル・エコノミー：東南アジアの農民叛乱と生存維持』勁草書房、1999年).

James C. Scott[2014], *Two cheers for anarchism : six easy pieces on autonomy, dignity, and meaningful work and play*, Princeton University Press(清水展訳『実践日々のアナキズム：世界に抗う土着の秩序の作り方』岩波書店、2017年).

James C. Scott[2017], *Against the grain : a deep history of the earliest states*, Yale University Press(立木勝訳『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』みすず書房、2019年).

